

序文とまとめ

増田 政久* 中野 昶**

最近、わが国でも下肢静脈瘤、深部静脈血栓症、静脈弁機能不全、さらに各診療科で発症し、致死性を有する肺血栓塞栓症が社会的にも話題になり、静脈疾患も、動脈疾患に劣らず注目されるようになってきた。

本シンポジウムでは、代表的な疾患をとりあげ、診断、治療の現況と新しい試み、将来展望について討論が行われた。

最初に金沢医科大学胸部心臓血管外科の松原が、わが国の静脈学の流れと下肢静脈瘤、深部静脈弁不全、深部静脈血栓症、急性血栓塞栓症について疫学、病態、治療について概説した。さらにわが国の静脈学を発展させるための問題点をあげ、全国規模での実態調査の必要性を説いた。

福島県立医科大学心臓血管外科の佐戸川らは、慢性静脈弁不全症に対する診断法の変遷と成果を検討し、脈波法と超音波診断法を組み合わせ、機能的かつ画像的に総合診断することの有用性を示した。また弁不全の成因を分子生物学的研究から検討し、単球の浸潤、サイトカイン、接着因子の関与を明らかにした。

東京医科歯科大学血管外科の広川らは、各下肢静脈疾患に対する外科治療について根治性と低侵襲性からみた工夫、改良を報告した。静脈瘤に対する局麻下ストリップ手術や硬化療法と高位結紮術を併用した静脈内レーザー治療法、静脈内不全交通枝切離のためのCO₂送気下内視鏡的筋膜下交通枝切離術の工夫、深部静脈血栓症の血栓摘除術の際の肺血栓塞栓症予防のためのplication法を述べるとともに、膝窩静脈捕捉症候群の診断、治療にも言及した。

国立千葉病院心臓血管外科の増田らは、千葉大学第一外科からの慢性肺動脈血栓塞栓症に対する血栓内膜

摘除術施行例53例について検討を行い、その有効性と成績向上のための術前surgical accessibilityの評価についてCTの有用性を報告した。

三重大学第一内科の中村らは、わが国の静脈血栓塞栓症に対する認識が近年、社会的にも高まりつつあることから、その現状を欧米と比較し、決して発生率が低いこと、わが国独自のエビデンスの確立の必要性を強調した。さらに診断法、治療法の推移からヘリカルCT、マルチスライスCT、下肢静脈エコーの有用性ならびに血栓溶解療法の有用性を検討することの必要性を述べた。また、肺血栓塞栓症予防のための静脈フィルターの適応に言及した。

以上より、わが国における静脈学は、古くから認識されている分野であるが、各疾患の病態も解明されるべき点が残されている。静脈瘤や静脈弁不全症に対する治療も低侵襲性と根治性から各種治療法が検討されているが、その優劣は明確でない。また各科にまたがり、致死性を有する急性肺動脈血栓塞栓症に関しては、その成因となる急性静脈血栓症に対する認識の普及が重要で、早期診断、迅速かつ適切な治療、発症予防にまでいたる十分な治療戦略が求められている。慢性肺動脈血栓塞栓症に関しては、限られた症例に対する外科治療の有効性は示されているが、その病態は必ずしも急性の延長上にあるとはいえず、今後解明されるべき点である。

いずれにしても各疾患ともに検討される問題点は多く、その背景となる臨床実態の把握が全国レベルで行われ、それに即した診断、治療および予防のためのガイドラインの作成が望まれる。

* 国立千葉病院心臓血管外科

** 三重大学医学部第一内科学教室

2003年4月10日受理